

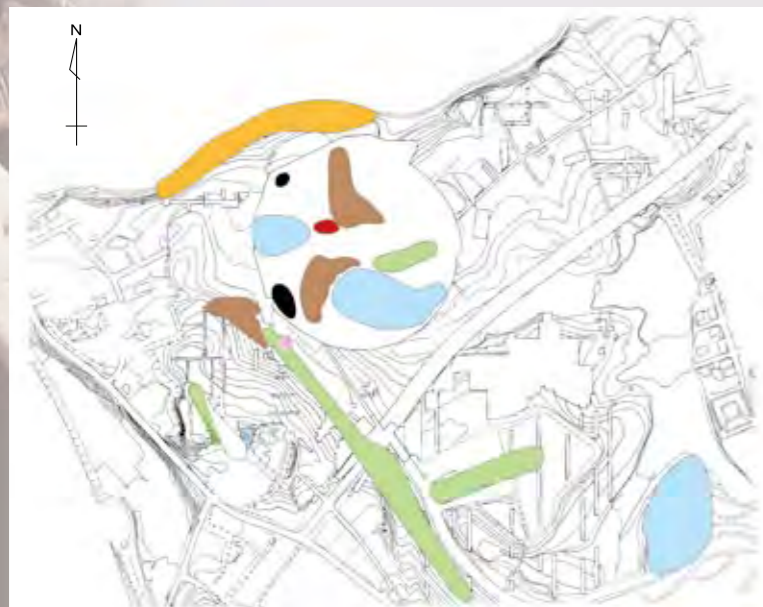
# ムラの変遷



縄文時代前期



縄文時代中期前半期



縄文時代中期後半期

- 竪穴住居
- 大型竪穴住居
- 道路と土坑墓（大人の墓）
- 盛土
- 斜面・谷の捨て場
- 埋設土器（子供の墓）
- 貯蔵穴
- 掘立柱建物

0 200m

# 建物



出土した大型掘立柱建物の木柱

復元された大型掘立柱建物と大型竪穴住居

縄文時代には竪穴住居、掘立柱建物などがあります。

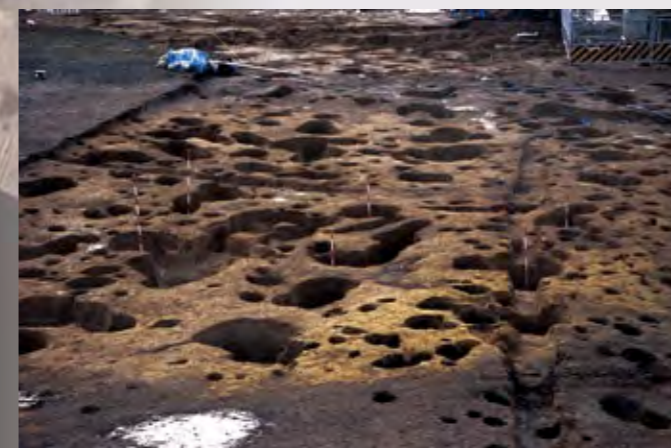
住まいには、地面に円形・楕円形の穴を掘り込んで作った竪穴住居が使われました。三内丸山遺跡ではこれまでに縄文時代前期から中期の竪穴住居跡が500棟余り見つかっており、平面形や柱の並び方、炉の形態が、



密集する竪穴住居跡

時期によって変化する様子をうかがうことができます。一般的な竪穴住居は直径3～4m、面積10㎡くらいですが、各時期1棟くらいの割合で、特別に大きな住居が作られています。それらは大型竪穴住居とよばれていますが、三内丸山遺跡で最大のものは長さが32mもあります。集会場や共同作業場などに使われたのではないかと考えられています。

北盛土と南盛土の境目付近を中心に、掘立柱建物も作られました。柱穴のみで床や炉が無いので、高床建物と推測されています。倉庫、葬制に関連する施設などの用途が考えられます。



密集する掘立柱建物跡

掘立柱建物の中で最も巨大なものは、遺跡の北西端で見つかった大型掘立柱建物です。用途としては、神殿、物見やぐら、モニュメントなどの説が唱えられています。クリの木による6本の柱を長方形に配置した建物で、確認された柱の太さはそれぞれ約1mもあります。柱の間隔（中心から中心）は4.2mです。その他の建物の柱間隔も検討した結果、35cmか70cmが長さの単位になっていたのではないかと考えられています。